

生活

佐野さん一家 「次は東京五輪で」

韓国では冬季パラリンピック平昌大会で、熱戦が繰り広げられている。開催地の人々とアスリートとの交流は、大会の大きな目的の一つでもあるはずだ。ロサンゼルス五輪(1984年)の女子マラソンで陸上ファンの記憶に残る選手、ガブリエラ・アンデルセン選手(72)はスイス。今は今も、日本人一家と温かい交流を続けている。きっかけは86年、札幌国際スキーマラソン大会へ招かれたときのホームステイだった。

(牛田久美)

試食が大好き

アンデルセン選手と文通を続けているのは、東京都練馬区の元陸上自衛隊員、佐野紀元さん(74)。札幌市の自衛隊札幌地方連絡部(現・地方協力本部)へ赴任中、市の募集に応じ、自宅へ迎えた。

アンデルセンさんは39歳でロス五輪へ出場。フラフラとよるめきながら完走し世界中から喝采を浴びた。当時の映像などによると、競技場へ入ってきた姿に観

ロス五輪のアンデルセン選手と交流30年

衆はどよめいたが、やがて総立ちの応援に。37位でゴール、「勝者に劣りませんと」と実況中継された。新聞は「最後の10分に二十数秒を費やし」「地鳴りのような歓声」と伝える。

翌85年の大阪国際女子マラソンでは5位。アンデルセン選手は日本が大好きになり、翌年は大阪、札幌などの大会に出場、日本の家庭でのホームステイを強く希望した。

佐野さん方に滞在中は、和食や折り紙、書道などを

楽しんだ。長男の小学校で剣道も見学。中学生の長女とたしなんだ茶道は、佐野さんが京都・福知山駐屯地のレンジャー部隊で習い覚えた、野だての作法だった。

「家庭的な文化体験を求めていた。国際交流を担いながらも、自然体でみんなに溶け込んでいた」中でもアンデルセンさんの気に入りは、百貨店の食品売り場。試食が好きで茶巾寿司、天ぷら、コロケ、焼き鳥、ゆず酢など何

圧力をかけない

でも口にした。「こんなにくは何でできるの?」と問われ、佐野さんは「イモから作ると英語で伝えるのに四苦八苦した」と笑う。

東京五輪の男子マラソン銅、円谷幸吉の話もした。陸上競技で唯一の日章旗掲揚に、感激の余韻が冷めやらぬ昭和41年のこと。佐野さんが防衛大学校を卒業し、福岡県久留米市の陸自幹部候補生学校へ入ると、先輩に円谷がいた。

「久留米は『二度とクルメ』といわれるほどつら。それだけに運動場を真つすく往復し続ける先輩の姿は、励みになった」



④アンデルセン選手と文通を続けている元陸上自衛隊員で警備会社顧問の佐野紀元さん(東京都練馬区)(牛田久美撮影、画像の一部を処理しています)

⑤「ガンバッテネ ガブリエラ アンデルセンさん」とローマ字で書いた手作りの横断幕。アンデルセン選手(左から3人目)が出場するスキーマラソンに駆けつけた佐野紀元さん一家と友人(昭和61年)(佐野紀元さん提供)



五輪で、円谷が国立競技場に戻ってきたとき、後ろを振り向かず走り続けたこと、円谷が色紙に記した「忍耐」の意味などをアンデルセンさんに話した。そして後年「疲れ切ってしまうって走れませんか」と遺書を残し、自死したことも。

「先輩に『メキシコ五輪がんばってください』とも言った。訃報に接し、過度のプレッシャーをかけてはいけなさと痛感した。ホームステイの受け入れは、陸上にささげた先輩の供養の気持ちもあったかもしれない」

アンデルセンさんははじつと聞き入っていたという。「アンデルセンさんは、好きなことを一生懸命にやり、あきらめない。勝負の相手は自分自身で、年齢にも負けない。人生まっしぐらで、いい刺激をもらった」。二十数通の手紙は「私たち家族の励みでもあるし誇りでもある」。

スキー選手でもあったアンデルセンさんは、自宅がある米アイタホ州の雪山で今も練習に励む。最新の手紙は、皆既日食の観察を夫や友人と楽しんだ近況に続け、こう結ばれている。「トウキョウオリンピックで会いましょう」